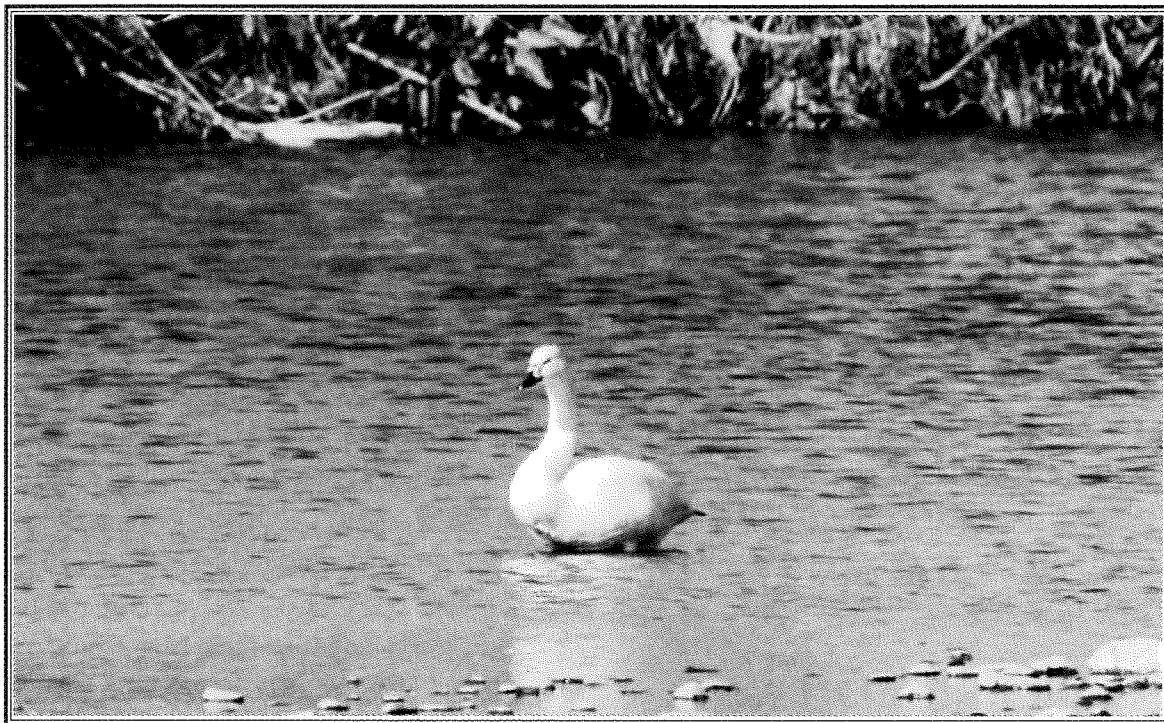


あるむぜお107

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 107

2014年3月20日



大丸堰に飛来したオオハクチョウ(昨年2月) 撮影 影山 昇 (府中野鳥クラブ)

目次

1-2 多摩川と府中

④多摩川に水鳥ふたたび

3 展示会案内

リニューアルリレー展 府中タイムトラベル

4-5 ノート 北鎌倉・北条氏・鎌倉街道

6 知る人ぞ知る! 府中ゆかりの人物

⑫小川義綏

7 最近の発掘調査

朝日町で新たに旧石器時代遺跡を発見!

8 連載 天文・宇宙の最新動向

④電波で宇宙を見る アルマ望遠鏡 (その2)

多摩川と府中

府中に暮らす人々は、昔から多摩川と深い関わりを持ち、多摩川をとおして、いろいろな動植物とつながってきました。多摩川と府中の織りなす諸相を紹介するシリーズの最終回です。

④多摩川に水鳥ふたたび

冬の多摩川と言えば、水鳥の宝庫。とりわけカモの仲間が水面を埋め尽くす光景は、府中市民自慢のロケーションです。カモの他にも、昨年は大変珍しいオオハクチョウまで飛来しました。しかし、実際は近年カモの数が減っているようで…。

多摩川と府中

④多摩川に水鳥ふたたび

105号で掲載の市民が選んだ府中30景のひとつ、「是政河原のオギ群落」は、多摩川の絶景であるとともに、洪水に対して河原の保全を担う環境として紹介しました。今回は多摩川に関わる府中30景のもうひとつ、「水鳥の群がる冬の多摩川」を取り上げます。

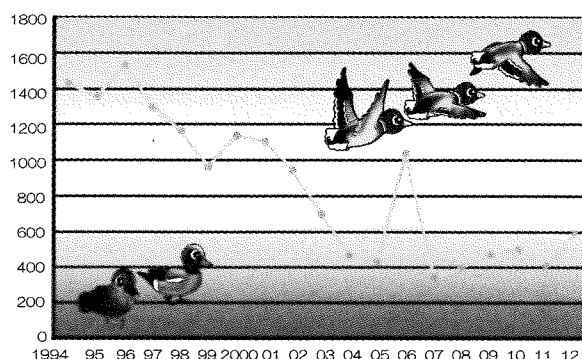
企画展「カモの常識」はご覧になりましたか？

水鳥の代表はカモ類です。冬になると北から集団で渡って来る、お馴染みの渡り鳥ですが、多摩川は相当数のカモを毎年受け入れる環境が整う、言わば常宿なのです。カモの繁殖地はシベリア東北部の寒帯から亜寒帯にかけての地域です。冬季は雪と氷に閉ざされ餌不足となるため、越冬を目的に温帯や亜熱帯に長距離移動します。日本にも多くが訪れる中、冬近くになると多数のカモが多摩川に飛来し、水面狭しと集団で漂います。この市民に馴染みの深い景観が認知され、府中30景に選ばれたのでしょう。

府中を流れる多摩川は、中流域に当たります。急流が谷底を下る上流とも、海水混じりで流れの緩い下流・河口域とも異なるエリアです。河原が広く、本流以外にも流路が分かれていたりもします。水中に上流から運ばれた土砂が堆積して中州を形成したり、水流の速い部分、淀んだ部分ありと、実に多様な場所を有します。このため、多くの種類の野鳥が、その行動様式に見合った各所を選択できるのです。カモをはじめとする渡り鳥が、繁殖や越冬場所に多摩川中流域を選ぶ理由もここにあります。公害による汚染で一時は死の川とも呼ばれた多摩川でしたが、下水処理場（現在の水再生センター）の普及とともに生物に対する配慮も高まり、現在ではかつての姿を取り戻しています。

ところが、実際は好環境であるはずの多摩川も、府中野鳥クラブによるここ数年のカモ調査によると、種類の変動こそありますが、個体総数が減少していることがわかりました。比較的個体数の多かったヒドリガモ・オカヨシガモ・オナガガモの減少が理由と報告されています。あくまでも、当

カモ総個体数経年変化



館から近い区域（調布市境～国立市境）のデータではありますが、「水鳥の群がる冬の多摩川」に陰りが生じているのは事実です。

多摩川中流域の環境は、ふたたび悪化してしまっただけでしょうか…重要な条件を忘れていました。中流域は、流域人口が圧倒的に多く、常に人の手が川に及んでいる区間だということです。護岸工事等、防災上の人工的措置や、流路の変更、利水目的で各所に設置された堰の数々と、様々な要素が関わっています。国土交通省の資料によれば、1時間当たり50mm以上や100mm以上の降雨発生回数が最近10年間で増えているという報告があります。頻りに起こる集中豪雨や台風接近で河川被害が増大すればするほど、大規模工事による補修が毎年のように実施され、常に環境が変化する状況にあります。年に一度の来訪で、その都度様変わりしている川の環境に、カモたちが戸惑いを覚えているのではないのでしょうか。データでは2006年のみ個体数が増えています。これは東北での豪雪が影響したと思われます。いつもは東北に飛来するカモが、その年だけ多摩川に宿を移したわけです。それは、多摩川を常宿としているカモでも、居心地が悪ければ他に移ることもあるということです。宿決めは、日本を訪れるカモの選択に委ねられているのです。市民憩いの風景「水鳥の群がる冬の多摩川」を廃れさせないためにも、カモの立場も意識しながら多摩川と関わっていく姿勢が必要です。過去から未来へ、人と多摩川の付き合いが続く限り、大変難しいテーマではありますが…。（中村武史）

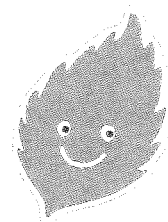
リニューアルリレー展

府中タイムトラベル

2014/4/8 (火) ~9/21 (日)

会場：本館1階特別展示室

観覧無料



ナビゲーター
「けやっきー」



あんどん
むかしの照明「行灯」

2008年（平成20）にオープンした「くらやみ祭」コーナーにはじまる、本館2階常設展示室のリニューアルが最終段階を迎えることになりました。本年4月1日から10月3日まで、リニューアル工事のため、常設展示室は休室となります。そのままでは、府中に関する基本的な事柄を知ることができる展示室が一時期とはいえ失われてしまいます。それを避けるために、新しい展示室ができるまでの間をつなぐ展示として「府中タイムトラベル」を企画しました。

この展示は2009年（平成21）、リニューアルで完成した「こども歴史街道」の「100万年前は海だった」「ムラができた」「国府が置かれた」「府中になった」「宿場ができた」「府中市になった」「ケヤキ並木」をもとに構成しています。それに加え、各時代のコーナーにこれまでの常設展示室でイチオシだった、指定文化財を含む目玉資料も展示します。

さらに、現行の常設展示室のなかから、府中の大正～昭和30年代頃の昔のくらしを知ることがで

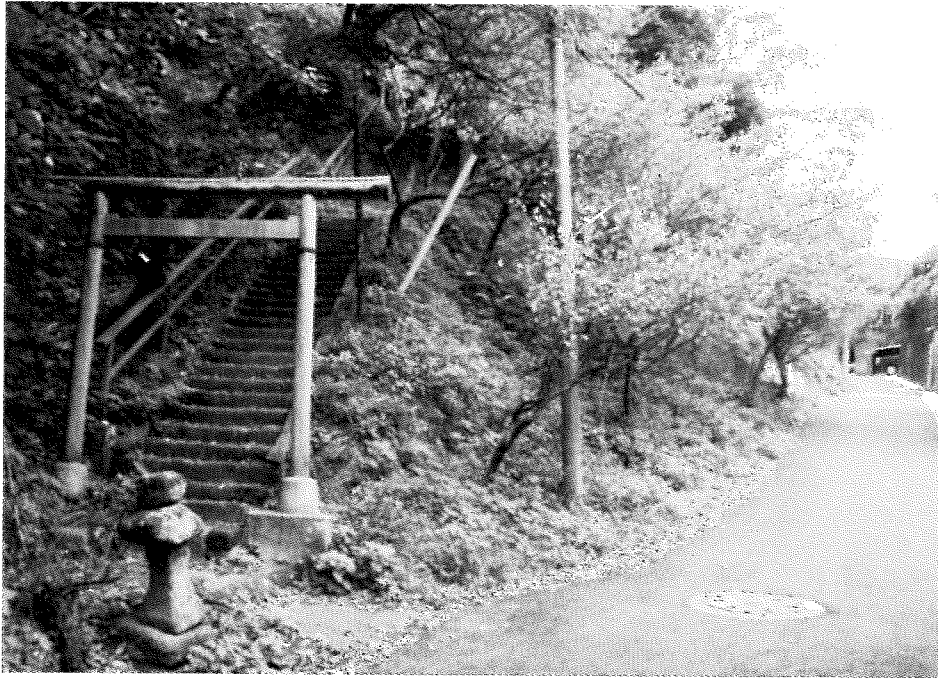
きる「体験ステーション」と民俗資料コーナーの一部資料を加えます。

狭いスペースで、決して充分ではありませんが、全体を通して府中の歴史、民俗、自然のアウトラインがわかるようになっていきます。新しい展示が完成するまでの約半年間、この展示会が郷土の森博物館の常設展示です。こどもから大人まで幅広い世代に100万年前から現代にいたるまでの武蔵府中を知っていただく機会になればと思います。

（佐藤 智敬）



府中市の近代を語る紙芝居映像「わたるくんの府中タイムトラベル」も2階常設展示室から引越します。



鎌倉から北鎌倉方面へ抜ける巨福呂坂旧道

▼ 北鎌倉、禅寺の風景

J R横須賀線の北鎌倉駅のホームに降り立つと、緑に囲われた谷戸がすっかり古都鎌倉の雰囲気（きんぎ）に包まれていることを感じます。改札を出るとすぐに円覚寺の門があり、奥深い境内を散策した後は、東慶寺・浄智寺・明月院・建長寺の順で由緒ある禅寺めぐりを楽しむことができます。どの寺も、鎌倉時代の北条氏嫡流（ちやくりゆう）の得宗家あるいは執権らの有力者が建立した寺です。

円覚寺を建立したのは、蒙古襲来を撃退した執権として有名な北条時宗。その時宗の妻と子（執権・貞時）が時宗邸に建てたのが東慶寺、時宗の弟・宗政の妻と子（執権・師時）が建てたのが浄智寺、時宗の父の執権・時頼が曾祖父（執権・義時）から引き継いだ邸宅の地に建てたのが建長寺です。あじさい寺として知られる明月院は、時宗が父・時頼の菩提のために建てた禅興寺（廃寺）という寺の塔頭でした。

散策コースからは外れますが、大船寄りにある常楽寺という寺も重要です。この寺は、鎌倉時代前半に執権・北条泰時が妻の母の供養のため墳墓の傍らに建てた粟船御堂を前身とし、今も茅葺の

お堂が往時の行まいを伝えています。北条氏が北鎌倉に最初に建てた寺と思われ、以来、得宗家や執権らの有力な北条氏一族は、この地に邸宅（別邸）や寺を造っていったのです。谷ごとに所狭しと禅寺が軒を連ねる独特の北鎌倉の景観はこうして作られたのです。

▼ 北鎌倉から武蔵国へ

さて、鶴岡八幡宮と若宮大路などがある鎌倉の中心部から、巨福呂坂や亀ヶ谷坂を越えた北側、建長寺・円覚寺のあたりから大船に至る地域が北鎌倉（鎌倉市山之内・大船）です。かつては相模国山内荘という皇室領の荘園が置かれていました。その所在地領主である山内首藤氏が、源頼朝挙兵の際に平氏方についたため山内荘を没収され、これを引き継いだ和田義盛も、建保元年（1213）に北条義時に滅ぼされると、この土地は北条氏の手に移りました。

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』によると、泰時が粟船御堂を建立したのは嘉禎3年（1237）で、直後の仁治元年（1240）には往還の煩いを解消するために「山内道路」造成のことが審議されています。鎌倉から山内（北鎌倉）に直接抜ける巨福呂

坂の整備が企図されたのです。翌日から翌年にかけては「六浦道」の造成にも取り掛かっています。山内も六浦（横浜市金沢区）も鎌倉から武蔵国へ通じる重要なルートです。

相模国鎌倉と境を接している武蔵国は、相模国とともに幕府成立時から関東御分国として、幕府の経済的な基盤で軍事的な要地の役割を果たしてきました。その国務を統括する武蔵国留守所惣検校職・畠山重忠が、元久2年（1205）に北条義時に討たれると、武蔵国支配の強化が北条氏によって進められ、以降は北条氏が武蔵守を独占し、国務は得宗家の掌中にありました。

当時武蔵守を兼務していた執権・北条泰時は、「山内道路」を通じて自らの邸と寺を置いた北鎌倉から武蔵国府（府中市）へ抜けるルートを、「六浦道」を通じて鎌倉の重要な外港・六浦湊を經由して武蔵国東部へ抜けるルートを確認しようとしたものと考えられます。このようにして、北条得宗家による北鎌倉開発と武蔵国支配は、幕府政治の独裁化と並行して始められていったと言えるでしょう。

▼鎌倉街道、ルートの変更

ところで、当初の鎌倉と武蔵国を結ぶルートは、鎌倉中心部西側の化粧坂を越えて、藤沢方面に向かい、境川沿いを北上する形だったと考えられます。それを示すのが『曾我物語』（真名本）で語られる源頼朝の行程です。建久4年（1193）に武蔵入間野で追鳥狩をするため、鎌

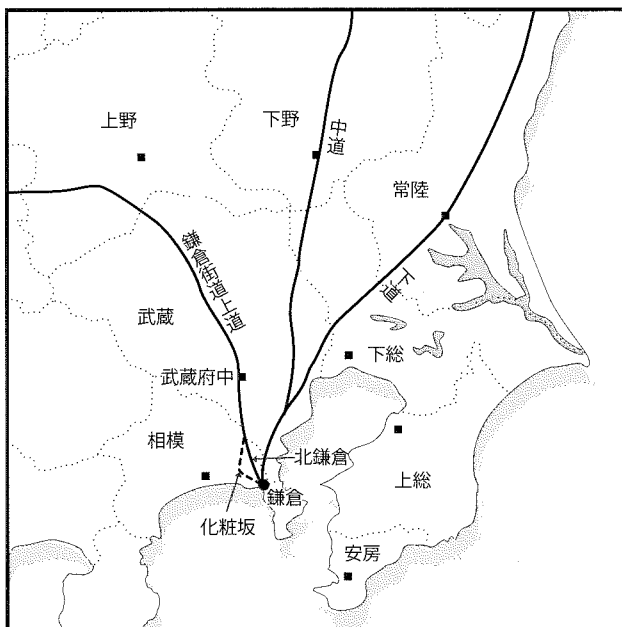
倉市中を出て「気幸坂」（化粧坂）を越え、柄沢（藤沢市）・飯田（横浜市戸塚区）を過ぎて、武蔵国関戸宿（多摩市）に着いたとあります。

『吾妻鏡』養和元年（1181）条に出る「武蔵大路」もこの化粧坂の道と見られます。このルートが幕府成立前後からの鎌倉・武蔵間の主要な鎌倉街道であったのですが、鎌倉後期以降、北鎌倉（山内）を所領化した北条得宗家が、この開発を通じて、巨福呂坂－北鎌倉－武蔵国ルートに変更・整備していったのではないのでしょうか。

▼幕府滅亡時の鎌倉街道

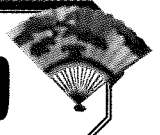
このことは奇しくもその北条氏が新田義貞の軍勢に攻められ幕府が滅亡する経過のなかを示されています。『太平記』によれば、元弘3年（1333）5月に義貞挙兵の報を受けた幕府は、北条（金沢）貞将を下河辺（埼玉県東部地方）へ、北条（桜田）貞国を「上路」から入間川へ向かわせました。この「上路」はいわゆる鎌倉街道上道のことでしょう。両軍は久米川（東村山市）で合戦し、北条方が敗退すると、幕府は北条泰家を分倍（府中市）に向かわせます。そこで分倍河原合戦が行われ、北条方は大敗するのですが、泰家が逃れる先が「山内」であることが注目されます。この時点で鎌倉側の武蔵方面からの防衛拠点は「山内」だったのです。北条方はさらに「粧坂」「極楽寺の切通し」「洲崎」（鎌倉市西部）に軍を向けますが、このなかに「山内」「巨福呂坂」が含まれていないのは、「山内」自体が当初から北条方の本営になっていたからではないのでしょうか。結果は、よく知られているとおり義貞の稲村ヶ崎突破により幕府滅亡を迎えるわけですが、これは鎌倉の北側を中心に組まれた防衛体制の隙間を突かれたという面もあったのではないのでしょうか。

北条得宗家による北鎌倉の所領化と別邸・寺院建立による開発、これと並行して進む武蔵国支配の強化。そのなかで鎌倉－巨福呂坂－山内から武蔵－上野－信濃国方面へ通じる幹線ルートが確立していったのではないかと思います。おそらくこれが当初の「鎌倉街道上道」とは異なる鎌倉時代後期の「上道」でしょうか。



鎌倉街道概略図

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物



⑫ 小川義綏

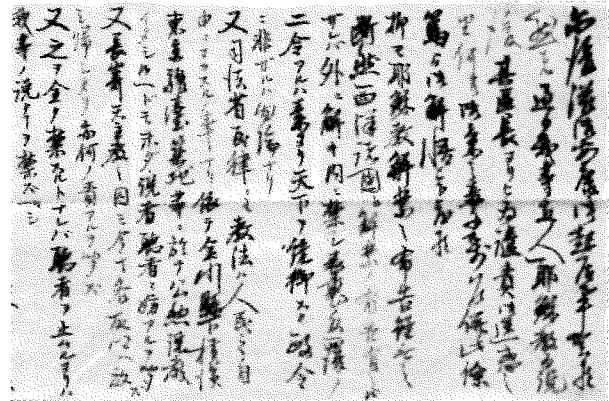
小川義綏は、明治10年（1877）に日本人最初の宣教師となった3人のうちのひとりです。その4年前の明治6年10月、彼は日本人のプロテスタント伝道者として初めて、村々をまわり説教を行いました。この時、多摩郡で最初の会場となったのは、彼の生まれた場所にほど近い、府中新宿（現・宮町）でした。

天保4年（1833）、義綏は小川藤四郎の長男として、府中宿本町の分梅（現・分梅町）に誕生しました。2歳の時両親とともに江戸に移り、その後八王子千人同心だった母方の伯父の養子になります。しかし、22歳で患った喘息が原因で、家督から離れ若隠居の身となりました。

文久3年（1863）、義綏は一念発起し、洋学を学ぶために神奈川に移住します。この年は奇しくも、後に深い関わりを持つことになるアメリカの宣教師タムソンが、横浜へ上陸した年でした。彼を通じて義綏は、キリスト教への信仰を深めていくことになるのです。

江戸時代、キリスト教禁止令が全国に出されたのは、慶長18年（1613）のことです。宣教師は国外追放となり、潜伏・潜入した者は厳罰に処されました。江戸時代を通してキリスト教の禁教は変わりませんでした。安政5年（1858）に締結した日米修好通商条約で、日本で暮らすアメリカ人の宗教の自由がうたわれると、再び宣教師の来日が認められました。外国人居留地で暮らす彼らは、日本語の研究や聖書の翻訳などを行い、密かに伝道の準備を始めたのです。

神奈川で洋学を修め通訳官となった義綏は、居留地に立入ることができるようになりました。そこで、タムソンの日本語教師として雇われ、聖書の日本語訳にも協力します。キリスト教への信仰を深めた義綏が、タムソンから洗礼を受けたのは、明治2年3月のことでした。しかしこの時、キリスト教は依然として明治政府から禁止されていたのです。



小川義綏書簡（部分）「新宿 比留間家文書」

諸外国からの批難を受け、約260年続いた禁令が解かれたのは、明治6年のことでした。もっとも解禁の布告はなく、禁教を記した高札の撤去が命じられただけでしたが、これによりキリスト教の信仰と布教が、政府から妨げられることはなくなりました。

この年の10月下旬、冒頭に記したように義綏は府中に伝道に訪れます。この時説教の会場となったのは、府中新宿の比留間七重郎家でした。七重郎の長男・雄亮の知人を介して、義綏から申入れがあったようです。七重郎はこの時の聴衆を4、5名だった記していますが、30名とする説もあり、参加者の人数は定かではありません。

翌11月、比留間家での説教に対し、キリスト教蔓延の阻止を願う要望書が神奈川県庁に出されました。このため、七重郎は始末書を出すことになり、これを知った義綏が12月3日に出した手紙が残っています。義綏は、七重郎に迷惑をかけたことを詫びた上で、司法省の民律でも教法の自由が認められており、今までに伝道者・聴衆ともに妨害された話は聞いたことがないと記しています。そして、今回の一件のように、真偽を知らない者がいるからこそ、自分がキリスト教の伝道を続けなければならないと結んでいるのです。

義綏は、明治初期から亡くなる大正元年までの約40年間、伝道の先駆者として強い信念のもとに活躍しました。この間、彼から洗礼を受けた者は1000名を越えたといわれています。（花木知子）

朝日町で新たに

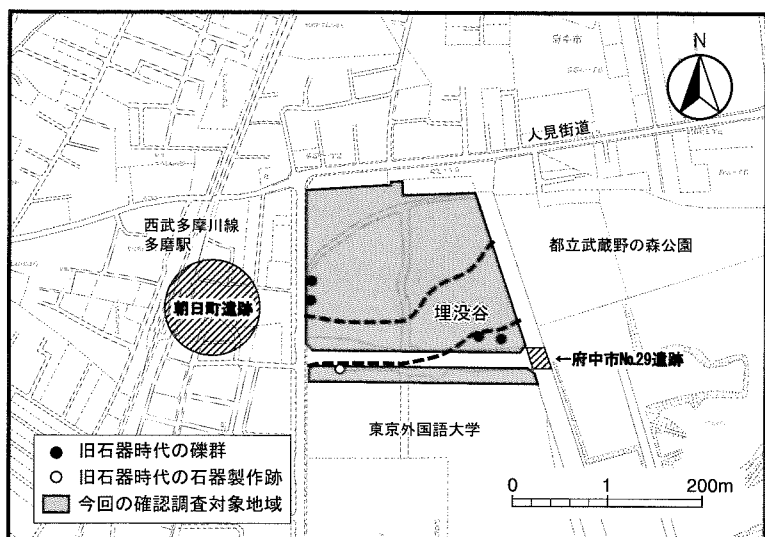
旧石器時代遺跡を発見！

朝日町3丁目

府中市ふるさと文化財課

湯瀬

禎彦



今回は、昨年、市内東部の朝日町で新たに発見された旧石器時代の遺跡を紹介します。発見場所は、東京外国語大学の北側にある調布基地跡地内です。ここは、1939年（昭和14）に調布飛行場の敷地の一部となり、太平洋戦争の終戦直後から1973年（昭和48）に日本へ返還されるまで、米軍用地として水耕農場などが設置されました。この調布基地跡地で遺跡の確認調査を行ったところ、今から2万年～1万5000年ほど前の旧石器時代の礫群4基と石器製作跡1基が発見されたのです。

発見された礫群は、いずれも拳大の石が数十点集まったもので、多くの石に火熱を受けた痕跡がありました。このことから、この礫群は、食物を蒸焼きや石焼き調理するために使われたものと考えられます。一方の石器製作跡は、細かい石の剥片が数多くまとまっていたものです。ここでは、細石刃と呼ばれる長さ2 cmほどの石器も見つかったことから、小型石器が製作されていたと考えられます。

さらに、今回の確認調査のもう一つの重要な成果として、旧石器時代に湧水が流れた痕跡と考えられる埋没谷の発見があります。この埋没谷はおおよそ東西方向に走り、その北側と南側の肩部で礫群と石器製作跡が確認されたのです。そして、この埋没谷の周辺地域に目を向けると、西側には旧石器時代の「朝日町遺跡」があり、南東側にも同じく旧石器時代の「府中市No.29遺跡」があります。こうした状況から、旧石器時代の人びとは、水を容易に確保できるこの谷の周辺部に活動の拠点を置いていた様子が見えてくるのです。

今回の確認調査では、縄文時代から中世以降の遺跡も発見されましたが、主要な遺跡は上記の旧石器時代の遺跡でした。したがって、この調布基地跡地は、隣接した旧石器時代の朝日町遺跡に連なる遺跡を包蔵する地域として捉え、同じ朝日町遺跡の名称を付けて昨年8月に東京都の遺跡登録がなされました。今後、新たに広がった朝日町遺跡での発掘調査の進展によって、市内東部における旧石器時代遺跡のあり方がより鮮明になることでしょう。



発見された礫群



連載

天文・宇宙の最新動向



④電波で宇宙を見る、アルマ望遠鏡 (その2)

インタビュー：本間隆幸

前回に続き、アルマ望遠鏡について国立天文台チリ観測所の平松正顕さんにお伺いします。

Q.重点的に取り組んでいきたいことは？

アルマ望遠鏡の3つ大きな柱は、銀河の誕生、惑星の誕生、生命の起源に迫ることですが、それだけでは収まらないでしょう。アルマ望遠鏡は、太陽や太陽系の惑星、木星の衛星や土星の衛星などの近い天体も観測できるし、120数億光年かなたの銀河まで観測できる非常にオールマイティーな観測装置です。これまでの電波望遠鏡の100倍性能が優れているので、どの分野・どんな天体を見ても新発見が出てくると思います。



銀河や惑星の誕生といったこれまでの研究の延長だけではなく、アルマ望遠鏡によって、全く新しい研究分野が生まれるような発見がある可能性があり、それが一番の楽しみだと思います。

Q.現在、望遠鏡の状況は？

アンテナは全て完成していますが、観測が始まったばかりで、フルパワーで稼働するにはあと数年かかります。最終的には、アンテナの設置範囲を山手線の範囲と同じくらいの直径18.5kmまで広げる予定ですが、現在はまだ直径1kmの範囲で観測しています。と言っても、アルマ望遠鏡と同じサブミリ波の電波干渉計で、今までで最大のものは、ハワイの山の上にあるSMAで、アンテナ8台で範囲は最大直径500mでした。

これ以上の距離で、信号を一つに集めて処理して電波画像を作ることを誰もやったことがありません。これから様々な試験を重ねて、だんだんと展開幅を広げていくことになります。今年は1.5kmに広げる予定です。この先はもっとペースを上げていけるように、機器の調整や新

しいデータ処理の方法が研究されています。

Q.展開幅を広げるのに何が大変ですか？

アルマ望遠鏡のような電波干渉計は、2つの望遠鏡から入って来る電波の時間差で画像を構成します。電波は1秒間に30万km進むので、本当に僅かな時間差にしかありません。したがって光ファイバーを通して送られてくる信号の精度が重要になり、とても難しい技術が必要になります。全部で66台アンテナがあるため、その組み合わせの数は膨大で、2,178通りもあります。それらを合わせて、やっと画像が作られるのです。

また、電波が来る方角の水蒸気の状態も影響します。アタカマは乾燥地帯といっても、多少は水蒸気が発生し、遠く離れたそれぞれのアンテナの先にある水蒸気の量が違ってきます。電波は水蒸気にあたると遅れて届くので、これを補正するために、その先にどれくらい水蒸気があるのか測定する装置が、アンテナごとに入っています。そして水蒸気によって、どれくらい遅れているのかを計算した上で、データを合わせるようにしています。これがなかなか大変です。研究と並行して、このような試験観測も、今たくさん行われています。

Q.最後にみなさんに一言お願いします。

アルマ望遠鏡では、常に最先端の天文学の情報を得ることができるよう、観測と並行して新しい観測装置を開発しています。今後30年間は運用が予定されているので、今の小・中学生が大人になっても、最新の研究に関わることができます。アルマ望遠鏡に多くの子どもたちが興味を持ち、未来の天文学者を目指してくれば嬉しいです。そして、その中から将来一緒に研究できる仲間が誕生することを楽しみにしています。

平松正顕 Hiramatsu Masaaki 国立天文台助教
略歴：2008年東京大学大学院理学系研究科天文学専攻修士
台湾中央研究院天文及天文物理研究所研究員を経て現職

※あるむぜお イタリ語で【博物館にて】の意